

# 大障教ニュース

大阪府立障害児  
学校教職員組合  
大阪市天王寺区  
東高津町7-11  
府教育会館704号  
(TEL) 6765-8904  
(FAX) 6765-8905

## 講演とレポートから学び合いました！ たくさんの参加者が交流！ 新・青年フェスタ

2月8日～9日、青年フェスタ実行委員会主催で、今年から大阪国際交流センターに場所を移し、「新・青年フェスタ」として開催しました。大障教からも、レポーターを含めてたくさんの方が参加がありました。

### 沖繩から考える平和、「真実」を知らない怖さ

全体会は、沖繩で修学旅行アドバイザーをされている下地輝明さんが「沖繩から平和を考える」沖繩戦、その後、現地から伝えたいこと」と題して講演をおこないました。下地さんは、戦時中や戦後占領下で米兵の女兒暴行殺人事件や轢殺事件、相次ぐヘリ墜落事件などの写真を紹介しながら沖繩の歴史を生々しく語りました。そして、戦時中の沖繩の戦死者を数字で見るとは、一人ひとりの生活や家族関係や世間体を含め、その人がどのような思いで生きてきたのかなどリアルに話されました。



沖繩の歴史と現在を語る下地さん



講演に聞き入る参加者

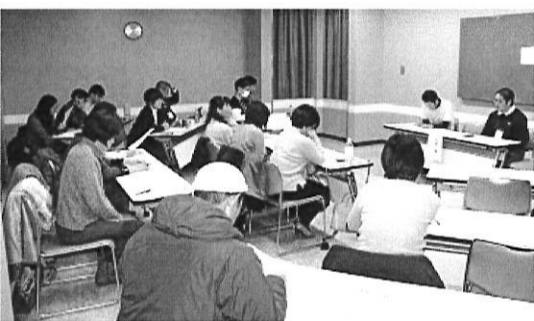
野古基地建設の現状を報告し、基地建設に関する情報をはじめ報道されることのない沖繩の「真実」を知らないことの怖さを鋭く指摘しました。講演の最後に、基地反対運動に関わる住民の思いにふれ、「機動隊員も含め」沖繩県民間ではけんかほしめない。戦争政策をすすめる国とたたかっている「何かが起こる前に子どもを命を守る」絶対に二度と戦争はしてはいけない」と語りました。下地さんの力強い言葉や意志を通して、あらためて平和への学びを深めました。

### 実践レポートをもとに活発に意見交流しました

講演後は、各分科会に分かれてレポート交流がおこなわれ、支援学校(知的・肢体)では4人のレポーターが発表しました。

知的の分科会からは2本のレポートで、一つは保健室という少数職種である養護教諭の中でも男性であるという立場から、子どもたちとの関わりで大切にしていることなどが話されました。全国や大阪の養護教諭の姿を見ても、圧倒的に少ない男性数に会場からは驚きの声があがりました。

また二次性徴の悩みも保護者や担任を通して投げかけられる男性養護教諭の果たす役割などが話されました。二つめのレポートでは、中学校国語教師である大村は「新編教



分科会のようす

えるということの話から、ご自身の言葉に置き換えて、生徒の気持ちと行動を大切にしておくべきという一年間のとりくみを発表されました。グループ討論の中でも、大人が先回りして子どもに「介入」するのではなく、子どもの気持ちと行動を「待つ」ことも教師の専門性ではないかということも話し合われました。

肢体の分科会からも2本のレポートを発表しました。一つは小学部の教材教具についてです。パワーポイントを使って音声や動きを入れた電子絵本や、ひっぱって札をめくる坊主めくり、楽しみながら参加できる神経衰弱、取っ手を引くことでボールが発射される的当てなど、様々な教材を紹介していただきました。

職場の先輩たちの実践からヒントを得て、子どもたちのからだの動きや興味関心を引き起こせるように工夫されていることが印象的でした。二つめには、働き方についてのレポートがありました。本当に私は多忙なのか、どのような仕事にどれくらいの時間をかけているのかなど、自身の職場の実態をふまえながら発表されました。また、「シラバス」の話では、フロアからも様々な意見が出て、活発な意見交流をすることができました。

その他にも、夕食交流会では大障教のなかまでテーブルを囲んで大いに盛り上がり、2日目の実技講座でも学習を深めました。今年も学び・つながりの多いフェスタとなりました。



「迷う」にはいくつもの意味がある。辞書には、①道や方向がわからなくなる。②決断ができない。③誘惑に負ける。自制心を失う。④死者が成仏(じょうぶつ)できずにいる。⑤まぎれる。区別がつかない。などが記載されている。文脈によって「迷う」の意味やイメージは変わるが、ネガティブな印象を感じる読者は多いのではないか。

話は転じて、最近の学校は「迷う」ことが生じないように、「様々な仕組み」が巧みに導入されている。代表例は、職員会議で採決を認めないことだ。寛容なき指導「ゼロトレランス」や、「〇〇スタンダード」もそうだ。「掃除検定」はその典型で、机の拭き方まで決められており、教育のマニュアル化が進められ、もはや教育の体をなしていない。

一九八七年に発行された「教育改革の原則」(岩波ブックレット)に、「問いと答えの間を大切にすること」として次の一文がある。「問いと答えの間で、あれこれの選択・分別をするゆとりを持つるのは、発達した大脳を持つ人間の特質であって、他の動物は反射やいわゆる本能的行動様式から十分に自由になることができない。だから、まちがいもまた人間だからこそともいえる。」

私は、教育活動の場において、「迷う」ことにポジティブな意味を与えるべきだと思う。それは、人間の分別・判断が働いている証拠であり、そのプロセスが学習に重要だと考えるからだ。サリバン女史は、「何故の問いこそ、子どもたちが理性と内省の世界に入る扉だ」と述べた。「迷う」を大切にできる教師であり学校でありたい。(久)

# 全国障害児学級・学校交流集会に参加して(感想その6)

## 設置基準が当たり前にある時代になりたい

## 学びの場の広がり運動の継続の重要性を痛感

オープニングでは、「イー  
スト・パブリックモンキーズ」  
による楽しくて力強いダン  
スと、合唱「しあわせはこべ  
るように」の催しがありま  
した。合唱とともにスク  
リーンに映し出される写真  
には、今から25年前の1  
月17日、阪神淡路大震災  
の時の写真がありました。  
その頃、私は生後間もなく、  
揺れがおさまるまで母が覆  
いかぶさって守ってくれて  
いたそうです。2018年  
に起きた北大阪大地震やい  
つ起こるか分からない南海  
トラフ地震…。いろいろな

ことを思い浮かべ、震災の  
恐ろしさや忘れてはいけな  
いことを改めて教えていた  
できました。  
養護学校義務制40周年  
企画では、現代では当たり  
前とされている義務教育が、  
全く当たり前ではなかった  
1980年以前の話があり  
ました。そのような時代が  
あったことは、知識として  
知っているつもりではあり  
ました。しかし、当事者の手  
紙や記録された動画をみる  
と、想像以上に障がい児・者  
の 인권が侵害されてきた事  
実に衝撃を受けました。そ

して、人権侵害の話は現代  
にも続いていました。特別  
支援学校のマンモス化は深  
刻な問題となっています。  
40年よりずっと前から、  
養護学校義務制や高等部の  
設立など人々の思いや活動  
が時代を変えてきた流れを  
学び、私も、さらに何年後か  
には特別支援学校の設置基  
準が当たり前にある時代に  
したいという気持ちとともに  
に、その活動に尽力する一  
員になりたいという思いが  
強くなりました。  
(泉南支援学校分会  
室田悠花)

今年も充実の年明け3日  
間、たくさんのことを学習  
し交流することができまし  
た。2日目に参加した講座  
について報告します。  
「学校卒業後の学び」の講  
座では、教育権保障、教育年  
限延長の運動の流れの中に、  
学びの作業所福祉型専攻科

作りが広がっていることが  
理解でき、今後の運動の方  
向性がより明確になりました。  
た。「エコール神戸」での実  
践にとまらず、「神戸大  
学・学ぶ楽しみ発見プログ  
ラム」の中で、知的障害の青  
年が神戸大の学生と共に学  
ぶ講座の開講の話など、学  
びの場の広がり運動の継  
続の重要性を感じることが  
でき、とても実りの多い講  
座でした。  
大阪でも、この春4月か  
ら四條畷市に「カラフル  
キャンパス」開校、そして北  
摂にも学びの場を作ろうと  
いう動きがどんどん広がっ

## 「いつもと同じ日」が続かなかった悲しみや苦しさを

今年で3回目の参加とな  
りました。毎回、自身の教材  
研究不足の反省をするとな  
もに、「明日からも頑張ろ  
う！」という前向きな気持  
ちになります。実践分科会  
などで発表されている先生  
方は、とてもキラキラして  
話をされていました。授業

の難しさばかりを悩み、教  
材研究が辛くなってしまう  
時もある自分とは違い、い  
かに子どもたちをわくわく  
ドキドキさせるのかを考え  
ていました。力をつけさせ  
るには、わくわくドキドキ  
の「あそび心」が大切だそ  
うです。  
3日間の学習交流集会を  
通して、全国の熱い思いを  
もった先生方の、実践の話  
を聞くことができ、大変勉  
強になりました。来年もぜ  
ひまた参加したいです。  
(泉南支援学校分会  
小金丸優希)

今年度は神戸ということ  
で、「阪神淡路大震災をふり  
返る」をテーマに今回の学  
習交流集会に参加しました。  
震災時中学生だった私は、  
強い揺れを体感じ、ベッ  
ドの上から飛び起きました。  
食器が割れている家の中で、  
中学校へ行く準備をしまし  
た。中学校に行くと窓ガラ  
スが割れており、午前中の  
授業はなくなり、片づけを  
して帰ったことを思い出し  
ます。もう一つ覚えている  
ことは、「1日だけの転校  
生」です。今はどうしている

## いかに子どもたちをわくわくドキドキさせるか

のか、その子と話した初め  
の言葉は「バイバイまた  
明日ね」でした。その記憶が  
再びよみがえりました。  
2日目のフィールドワー  
クに参加し、当時の爪痕を  
残している地を訪れ、自分  
が経験しなかった地盤沈下  
や高速道路の折れた柱を間  
近に見て、とんでもないこ  
とがおこったことを痛感し  
ました。午前中に見学した  
防災センターでは、当時の  
映像を体感しながら映像を  
観るシアターを体験しまし  
た。被災者の声がたくさん

集まった場所で「いつもと  
同じ日」が続かなかった悲  
しみやつらさがありました。  
午後からは、午前中に見き  
れなかつた防災センターを  
個人的に訪れてフィールド  
ワークを続けました。南海  
トラフ地震がいつ起こるか  
わからない毎日ですが、減  
災や防災等いざという時の  
準備が必要だと感じ、帰宅  
してすぐに行いたいと思い  
ました。いろいろな教材も  
たくさん交流することがで  
き、充実した学習交流集会  
になりました。  
(堺支援学校分会  
小島良平)

今年で3回目の参加とな  
りました。毎回、自身の教材  
研究不足の反省をするとな  
もに、「明日からも頑張ろ  
う！」という前向きな気持  
ちになります。実践分科会  
などで発表されている先生  
方は、とてもキラキラして  
話をされていました。授業

の難しさばかりを悩み、教  
材研究が辛くなってしまう  
時もある自分とは違い、い  
かに子どもたちをわくわく  
ドキドキさせるのかを考え  
ていました。力をつけさせ  
るには、わくわくドキドキ  
の「あそび心」が大切だそ  
うです。  
3日間の学習交流集会を  
通して、全国の熱い思いを  
もった先生方の、実践の話  
を聞くことができ、大変勉  
強になりました。来年もぜ  
ひまた参加したいです。  
(泉南支援学校分会  
小金丸優希)

今年度は神戸ということ  
で、「阪神淡路大震災をふり  
返る」をテーマに今回の学  
習交流集会に参加しました。  
震災時中学生だった私は、  
強い揺れを体感じ、ベッ  
ドの上から飛び起きました。  
食器が割れている家の中で、  
中学校へ行く準備をしまし  
た。中学校に行くと窓ガラ  
スが割れており、午前中の  
授業はなくなり、片づけを  
して帰ったことを思い出し  
ます。もう一つ覚えている  
ことは、「1日だけの転校  
生」です。今はどうしている